



米山梅吉記念館

館報

秋号

2023 Vol.42



被災した浅草公園

『東京ロータリークラブの70年』より



ロータリーの家の子どもたち

大正 12 (1923) 年 9 月 1 日、関東大震災が発生した。当時米山は、軽井沢の別荘に滞在していた。東京、神奈川など震源地に近いところはもちろんのこと、軽井沢でも余震が続いた。10 月に帝都復興院ができて、米山は参与になった。米山は、地震の様子を次のような短歌で残している。

地震の歌

天の柱地の維となみ亥の歳の九月の今日をはての此の世か

なみの夜半おのづからなる蟲の音を胸まださわぐ窓の外にさく

姿あはれに焼けただれたる大樹の根秋の日あみて芽ぐめるも嬉し

当時、東京ロータリークラブは創立からまだ 3 年足らずで例会も月に 1 回、出席率も低いなどクラブの存在自体が危うかった。しかし、震災の一報を聞いた国際ロータリーのガイ・ガンデーカー会長からお見舞いの電報と義援金が送られてきた。そして世界各国から集まった約 89800 ドル (現在の 140 億円ともいわれる) の義援金と物心両面の支援に、日本のロータリアンは自分たちの活動を振り返り、その精神をあらためて考えることになった。東京ロータリークラブは、義援金を小学校の再建や被災者救援にあてた。震災翌年の 10 月には、ロータリーの家と名付けられた孤児院が完成した。くしくも国際ロータリーでは「個人の奉仕か団体の奉仕か」という議論が巻き起こり、セントルイス宣言 (23-34) が決議された。1923 年はロータリーにとっても意識改革の年になった。

関東大震災から 100 年、地震や水害など自然災害の発生が各地で増えている。『米山梅吉伝』を書いた佐々木邦氏の言葉もまた、私たちに意識改革を促しているかのようである。「人間はこういうことを天変地異と称して自然の暴威のように思うけれど、実は人間そのものが他の生物と同じような自然の裡に発生して自然の裡に居候をしているのだから仕方がない。」

春季例祭

報告

■ 日 時／2023年4月22日(土)午後2時

■ 会 場／米山梅吉記念館ホール

開会前墓参

講 演

【演題】「孫文と梅屋庄吉の友情から学ぶ
時を繋ぐ交流の在り方」

【講師】小坂文乃氏（日比谷松本楼代表取締役社長
東京RC）

【アトラクション】マリンバ演奏 柴山拓也・由美氏



講師 小坂文乃氏

本日のテーマ＜孫文と梅屋庄吉の友情＞を語る前に中華人民共和国における現在＜孫文＞がどのような存在であるかを最初にご紹介する。2016年、孫文生誕150周年記念行事が北京の人民大会堂で開催された。その式典で習近平国家主席は原稿を読まずに50分間孫文について語った。私は孫文、黄興の子孫とともに式典や交流事業に参加した。例えば日本の明治維新に活躍した人物の子孫を集めて、政府が記念式典を開催する、というような話は聞いたことが無いが、中国では孫文の革命や生誕の記念行事は5年、10年毎に国家レベルで開催されている。

私の曾祖父 梅屋庄吉は長崎県生まれである。



孫文と梅屋庄吉の友情から学ぶ
時を繋ぐ交流の在り方

小坂 文乃 氏

14歳で上海に渡り、大陸を転々とした後、香港で写真館を開いていた。この香港の写真館で孫文と梅屋庄吉は出会った。1895年3月のことである。梅屋庄吉はその経験の中でアジアの情勢を憂いており、＜アジア人はアジア人同士手を取り合って強いアジアを作らなければならない。＞と思っていた。当時医師であった孫文は西欧列強の植民地化による圧政に苦しんでいた中国の民を救うには医術では救えない、と梅屋庄吉に訴えた。2人はひと晩語り合い、中日の親善、東洋の平和、人類の平等について意見が一致した。『革命』を志していた孫文に梅屋庄吉は、「君は兵を挙げよ。我は財をもって支援す」と約束した。孫文29歳、梅屋庄吉27歳であった。

孫文は広州で最初の革命を試みるが失敗。梅屋庄吉は孫文に逃亡の費用を渡した。孫文はそれを元に日本、アメリカ、イギリスまで渡った。梅屋庄吉自身は香港からシンガポールにわたり、映画のビジネスを始めた。これが大成功し、日本に凱旋帰国。東京・大久保百人町に撮影所と自宅を構え、映画ビジネスを始めた。ドキュメンタリーフィルム、娯楽作品などさまざまなジャンルの映画を撮影し、上映した。『映画界の風雲児』と呼ばれ、ビジネスは大成功していった。ちなみに、1911年の辛亥革命の実写フィルムや日本人が初めて南極大陸に立った映像が残っているがこれは梅屋庄吉が派遣したカメラマンによって撮影されたものであり、中国・日本それぞれの近代史における最も古いドキュメンタリーフィルムである。

梅屋庄吉は実業家であったが、孫文との約束を守り、稼いだお金は革命支援に投じられた。武器を購入し、革命軍へ送る他に革命の同志やその家族の面倒までと支援は多岐にわたった。革命軍からの武器注文書や宮崎滔天ら大陸浪人たちからの生活支援を訴える手紙などが現在も史料として残っている。

1915年、当時東京に亡命していた孫文は宋慶齡と結婚した。結婚披露宴は梅屋庄吉宅で行われた。この結婚に関して、孫文には最初の妻である盧慕貞との間に子女もあり、革命の同志や宋慶齡の父親などが猛反対した。孫文は宋慶齡を心から想う気持ちを梅屋庄吉の妻トクに伝えた。トクは孫文と宋慶齡が心から愛しあっていることを知り、二人が結婚に至るまでさまざまな世話をした。家族の反対を押し切って孫文と結婚した宋慶齡は、梅屋トクを本当の姉のように慕っていた。宋慶齡から梅屋トク宛の手紙には、当時の緊迫した情勢なども書かれており、二人の信頼関係が読み取れる。

1925年、孫文が他界。梅屋庄吉は孫文の偉業を後世に伝えるため、孫文の銅像4体を制作し、ゆかりの地に贈呈した。この梅屋庄吉寄贈の銅像は広州中山大学キャンパス中央、広州黄埔軍官学校、南京孫中山記念館、マカオ孫中山記念館に現存している。

孫文と梅屋庄吉が他界した後、日中戦争が起こり、国交回復にも時間を要した。



日中国交正常化後、中華人民共和国の副国家主席となっていた宋慶齡は1972年に梅屋庄吉夫妻の娘、国方千勢子夫妻を北京に招いた。その時に宋慶齡が書いた手紙にこう記されている。「あなた方の来訪により、当時の記憶がよみがえりました。梅屋庄吉ご夫妻と孫文、私の宝のような友情はどんなに時が経っても、どんな情勢になっても決して消し去ることは出来ません。」

「孫文と我の為したることは決して口外してはならず」という遺言を残した梅屋庄吉の革命支援は長いこと語られることもなく歴史の底に沈んだ。

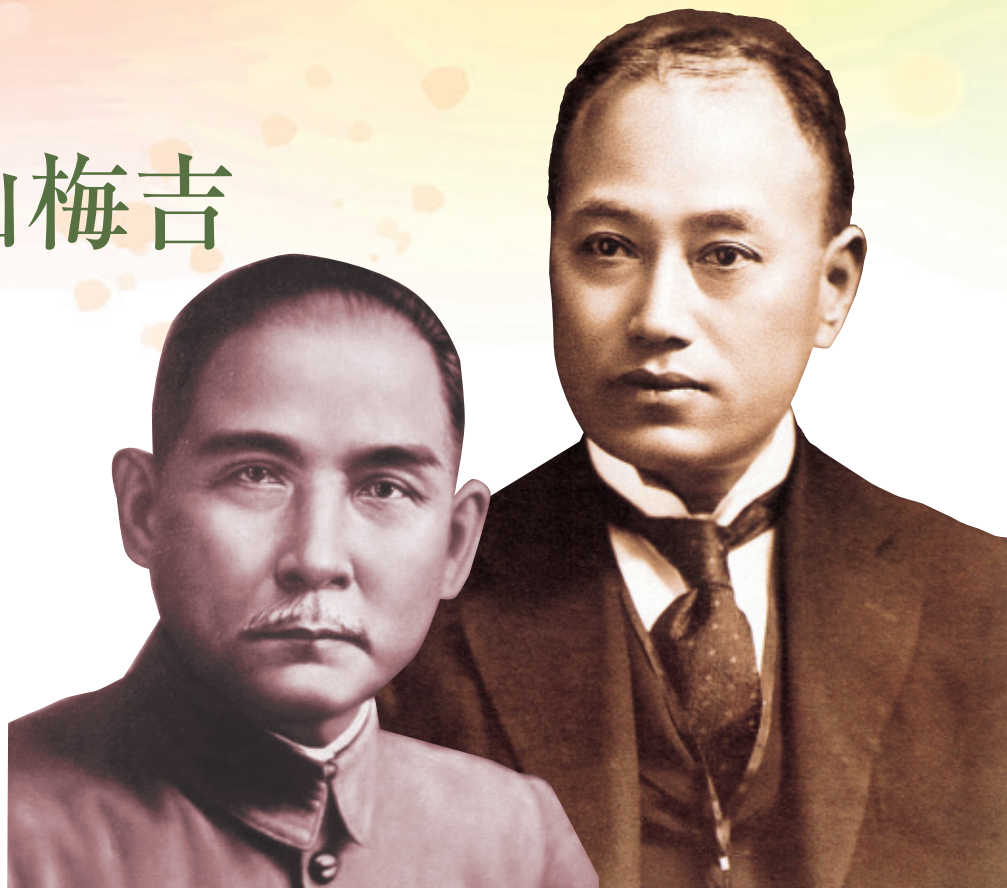
2008年5月、10年ぶりに中華人民共和国国家主席が来日した。胡錦濤前国家主席は福田元首相とともに東京・日比谷松本楼で100年前の孫文と梅屋庄吉の歴史史料をご覧になられ、『中日友好世代』と揮毫された。

この時から孫文と梅屋庄吉の友情をベースにしたさまざまな交流が行われるようになった。

2010年の上海万博を皮切りに北京・武漢・広州・香港・長崎・東京・シンガポールで展示会や講演会を開き、多くのアジアの人々にこの歴史を伝える機会をもった。

この歴史を伝える活動を始めた2008年以降、世界は大きく変わった。とりわけ、中国の経済的な発展は目覚ましい。経済的な結びつきが強い日本と中国であるが、歴史認識や相互理解が深まった状態とは言えないのではないだろうか。隣国でもあり、古くから交流があったにも関わらず、残念に思うことはしばしばある。私に出来ることは小さいことかもしれないが、孫文と梅屋庄吉が若い時に出会い、＜東洋の平和・人類の平等＞について想いを一つにしたことを、これからアジアを生きる若い世代に語り継ぎ、交流していくことにより、新しい希望溢れるアジアを築いていけたら、と願っている。

孫文と 米山梅吉



4年あまり続いた第一次世界大戦が終盤をむかえ、アメリカ有識者の目はアジアの将来に注がれた。当時、三井合名会社理事長という職にあった團琢磨も支那の実情を知り、支那の実業界と協力して事業を興すことの可能性を探りたい、と考えるようになった。しかしこれは表向きの理由で、実は「各地に割拠する軍閥の動向を知ることは、三井グループの経営判断のために不可欠のことだった」(谷内宏文著『点描 米山梅吉』)そこで、三井銀行常務取締役だった米山に同行を求め、三井合名会社・玉木懿夫、秘書田村鐵輔、医師・大原芳雄、三井銀行・佐田弘治郎の6人で東京を出発した。大正7(1918)年10月12日のことである。旅程は次のとおりである。

10月14日 釜山を経由し京城着、朝鮮総督府など訪問
27日 平壤着
三菱製鉄所、平壤商業会議所の招きに応ずる
31日 奉天着
当時、朝鮮・満州で流行性感冒が流行していて、米山も風邪気味ということで一日静養した

11月6日 大連着

9日 青島着

14日 曲阜着

孔子廟を詣でる 夜北京着

ここで團と米山は大総統徐世昌、国務総理段祺瑞らに謁見。在北京日支両国有力者との会談や梅蘭芳の観劇など、過密なスケジュールをこなしていった。

12月1日 南京を出発し蘇州を経由し上海に到着



船上の團(前列右端)と米山(前列左端)

3日午前、団と米山は三井物産支店長の社宅にて孫文に面会した。「孫文はこの時には、徐と段の組合せによる北京政府とは袂を分かち、一時日本に亡命した後、西南軍閥の援助により広東に「中華民国軍政府」を組織し大元帥に就任(大正六年九月)したものの、この軍政府からも分かれて上海に移住『建國方略』『中国存亡問題』などの著作に専念していた時であった。一方、徐と段の北京政府は、実質は北洋軍閥を握る段の政權で、これに対し日本は、いわゆる「西原借款」(大正五年から七年までの間に、寺内正毅首相の私設秘書西原亀三らの仲介によって段政權に対して総額一億四千五百万円の借款が行われた)と呼ばれる財政支援を行い、強力に挺入れをしている最中だった。そしてこの借款での物資供給には、三井物産・大倉組・高田商会の出資で作られた「泰平組合」があたっていたから、この「段・團会見」は単純な表敬謁見の域を越えた、政治的意味合いがあるものだったと考えられる。」(『点描 米山梅吉』)しかも孫文は唐紹儀、張繼などを伴っていたが、秘密裏の行動であった。

團らはまず「日本と支那は友好的であるべきなのに、うまくいかないのはどちらの責任なのか」と問いかけた。これに対して孫文は「其の責は日本に在りと放言した」。(米山梅吉『看雲録』より)つづけて團らは「理想の政治を行うために中日両国の国民的連合を主張したが、その心は今どうであるか」を尋ねると、孫文は、「日本に対しては敬意をもっている。日本の陸海軍は欧米各国に拮抗し文明科学、医学においてもその進歩は目を見張るものがある。ただ遺憾なのは日本が欧米列国の後を追ってみだりに支那を脅迫し、侵略的態度をとることで日支の関係は悪化した」と述べた。團らは「清朝の時代、欧米各国がみだりに支那を侮ったわけではなく、支那は簡単に南京条約を結び香港や広東、上海を欧米の自由にさせた。これらはすべて支那自国内の擾乱に起因することである。支那の外交政策は目前のことにとらわれ難事を招いて

いる。日本としてはこれらを戒めとしており、他の侵略主義の列国とは事情が異なる。ロシアとは国運を賭して大戦となったが、支那は欧米列国の脅迫に対抗することなく、日本に対する問題ばかり過大視することは誠意に欠ける。」と語った。そして「支那が本当に日本と善隣の関係を保とうとするのであれば、従来の悪習をやめて誠意をもって向き合うべきだ。開国以来苦難を乗り越えてきた日本は、欧米崇拜主義ではうまくいかないことを悟り、独自の努力と発明によって今日の姿を築いてきた。支那もこれを教訓にして国内外の事にあたればよりよくなるであろう」と説得したが「孫は黙して亦答ふところがなかつた」。(『看雲録』)しかしその後孫文は、1924年11月神戸で行った講演で、ヨーロッパの侵略によって衰退を続けたアジアが、日本による不平等条約の撤廃をきっかけに復興へ向かったこと、アジアの諸民族は日露戦争の日本の勝利によって勇気づけられ独立運動を起こしたことを指摘。西洋の文化は武力を中心とする文化で、東洋の文化は道德仁義を中心とする文化であり、アジアの民族が団結して武力による文化に対抗することを呼びかけ、拍手喝采を浴びている。

孫文との会見の様子を米山は「支那の政治家が、其の志を得れば自己の權勢を恣にせんとし、政争を其の目的に有利にするが爲めには、術策弄^{ほうさくろう}せざる所なきは、眞に悲しむべき極である」(『看雲録』)と締めくくっている。



米山梅吉と洋画家白瀧幾之助 の関係について



一般財団法人福田美術振興財団

学芸員 阿部 亜紀

米山梅吉の肖像画

まだカラー写真がなかった時代、色彩が再現でき、かつ保存性が高い油彩の肖像画は人々から需要がありました。米山梅吉(1868-1946)も肖像画の制作を依頼した一人で、現在米山梅吉記念館には《米山梅吉像》が収蔵されています。

創立45周年記念



三井住友信託銀行から寄贈された肖像画

この絵は、米山が創業した三井信託株式会社で長らく社宝として社長室に掲げられていたもので、現在の三井住友信託銀行に引き継がれた後、平成26年(2014)度に米山梅吉記念館に寄贈された作品です。^{※1}

画面には、眼鏡を手に椅子に腰掛け、こちらへ視線を送る米山の姿が描かれています。現存するモノクロ写真と比較しても遜色ないほどに特徴が捉えられた本作は、明治から昭和にかけて活躍した洋画家・白瀧幾之助(1873-1960)が揮毫したものでした。

白瀧幾之助について



白瀧幾之助は明治6年(1873)に豊岡県(現在の兵庫県)朝来郡生野奥銀谷町に生まれました。同じく生野出身の洋画家である和田三造、青山熊治と共に「生野三巨匠」に数えられています。画学生時代は黒田清輝(1866-1924)に師事し、日本ではまだ目新しかった光を意識する印象画風の描法に傾倒しました。その後約7年間の欧米留学を経て、風俗画・肖像画・静物画・風景画など多岐に渡るテーマに取り組み、文部省美術展覧会など官設の展覧会で最高賞を受賞、審査員も務めました。肖像画家としての手腕も確かであり、外務省新庁舎に飾られた芳澤謙吉をはじめ、井上準之助、池田成彬、深井英五など日銀総裁や、衆参両院の歴代議長や総理大臣、県知事らの作例があります。また、晩年には三井高精の「三井洋

画コレクション」の蒐集を手伝い、昭和27年(1952)に洋画界に尽力した功績を讃えられ、日本芸術院恩賜賞を受賞するなど、近代を代表する洋画家として高く評価されました。

米山梅吉と白瀧幾之助の関係

では、白瀧はどのような接点から米山の肖像画を描くことになったのでしょうか。これについては、彼らの共通の知り合いである間島弟彦(1871-1928)が関係していたのではないかと考えています。

間島は尾州名古屋藩士で歌人だった間島冬道の7男に生まれ、青山学院の前身の東京英和学院で学んだ人物です。米国の大学に留学後、十五銀行で働いていた彼は、米山の勧めで明治31年(1898)に三井銀行へ入行し、欧米各地の視察を任されました。帰国後は横浜支店長、大阪支店長を歴任して取締役となり、病で辞職後は青山学院理事を務め、遺志によって青山学院構内の図書館(現在の間島記念館)建設費を寄付したことで知られます。米山とは公私共に親しく、米山が40代から詩に親しむようになったのは、漢詩や俳句に精通していた間島の影響が大きかったといわれています。

一方、白瀧と間島が出会ったのは明治37年(1904)、米国の地でした。欧米を一通り視察し、帰国直前に再び米国に返っていた間島は、日本から渡米して間もない白瀧と出会い、交流したようです。これが縁となったのか、明治44年(1911)1月、38歳の白瀧は間島の妹・間島志保子と結婚し、時に間島の肖像画を揮毫することもありました。また、昭和3年(1928)に間島が57歳で昇天した折には「未亡人、近親者、米山梅吉ほか学院関係者数名はハリス館における夕食会をすませた後(埋葬式の)会場に向った」※2といい、米山と白瀧は「間島と関係が深い人物」として互いに顔を合わせることもあったようです。

このような繋がりを背景に、白瀧は大正5年(1916)に《米山梅吉像》を揮毫することになりました。制作費は当時の千円程、現代の価値に換算すると400万円程だったそうです。米山の期待に応えようと、白瀧も「第一、其の人に似ると云ふこと、第二、性格が良く現はれて居ること、第三、画として立派なものであるこ

と」※3という心得を礎に完成度の高い肖像画を描きました。米山もその出来栄に満足したのでしょう、それから約8年後に白瀧は再び米山の肖像画を描くことになりました。



2点目は《米山氏ノ像》という作品で、大正13年(1924)に開催された第5回帝国美術院展覧会(以下帝展)の出品作として描かれました。しかし、残念ながらこの肖像画の所在は明らかではなく、現物を見ることは叶いません。現存するモノクロ画像を見ると、本作は縦長の画面に、米山の立像を描いていたことが分かります。展覧会の出品作は、会場で少しでも目立たせようと大作になる傾向があるため、等身大の作品だった可能性も考えられるでしょう。

白瀧幾之助と米山駿二の関係

第5回帝展が開催されたのと同時期、米山の次男・米山駿二(1905-1926)も画家を志していました。そもそも米山梅吉は、歌舞伎、茶道や詩書画に精通しており、三男の桂三は、父について「絵筆こそ手にしなかったが、父の書はまことに一番独特の絵画的芸術作品であるといっても過言ではない」※4と語るほどでした。また、一時は絵画を愛好し、頼山陽や、渡辺崋山を好んだそうです。※5 こうした父の芸術的特性を最も受け継いだのが駿二だったと言われています。そして、独学で真剣に絵を描く次男に対して、米山は師として白瀧幾之助を紹介しました。

後年、桂三は駿二について次のように回想しています。

「兄駿二が毎日のように、ゴッホの「自画像」の色刷りを手本にして鏡に向ってせっせと絵筆を動かしている姿は、やがて父の眼にもとまったようであった。恐らく父は、芸術に精進しようとしている兄を見て、半ば喜びを感じながら半ば不安を感じたらしい。大正十三年から十四年の秋、兄が全く自己流で描き上げた「自画像」をかついで帝展に出品したことが「財界名士の息 帝展へ搬入」といつた見出しで新聞に報ぜられるや、父の驚きもひとしおであった。もちろんそれは落選のうきめを見たが、この時父は兄に自己流をやめて先生につくことをすすめ、父の知人であった白瀧幾之助画伯の門をたたかしたのである。(兄の死後、父が二科会に匿名のY氏賞を寄付したのも、兄の芸術を永く記念したかつたからであろう。)」※6

当時白瀧は日本水彩画研究所などで教壇に立つことはありましたが、個人の画塾を開いていたという記録は残っていません。しかし、大正12年(1923)に2度目の渡欧から帰朝した2年後、森芳雄(1908-1997)という画家に木炭デッサンの指導をしていたことが分かっています。駿二が白瀧に師事したのもこの時期で、彼も森らと同様、絵の基礎となる素描に取り組んでいたのかもしれません。しかしながら、駿二は大正15年(1926)6月に21歳で夭折し、その夢は絶たれることになります。

悲痛な境遇に陥った米山と白瀧。しかし彼らの関係はここで途切れることはありませんでした。それから約9年後、昭和10年(1935)に白瀧が理事長を、そして米山や複数の洋画家が理事を務める「昭和洋画奨励会」が創設されることになりました。この奨励会は「基金一万円を以て財団法人組織にし、(中略)洋画中の優秀作品に対し数名の審査員(理事)が査定し、賞金を呈上」する組織でした。先ほど紹介した三男・桂三の回想文にある「Y氏賞」とはこのことで、賞金は帝展、春陽会、二科会といった各展覧会に呈上されたようです。この活動を通して、米山は未来ある若き洋画家達に、亡き息子の姿を重ねることもあったのでしょう。

その後、同会の活動は昭和20年(1945)まで続きました。解散時には病床に在った米山に代わって、白瀧らが手続を取ったといえます。※7 米山の芸術に関わる活動の背景には、常に白瀧の存在があったと言っても過言ではないのです。



まとめ

以上のように、今回は明治から昭和時代という黎明期に活躍した銀行家の米山と洋画家の白瀧が、「芸術」を起点に、知られざる強固な繋がりを持っていたことを取りまとめました。白瀧が《米山梅吉像》を揮毫した時期を発端として考えると、彼らは米山が亡くなるまで少なくとも30年間交流を持っていたことになります。この長期にわたる関係は、ただの「モデルと画家」に留まらない、特別な絆があったことを示唆しているのではないのでしょうか。この背景を踏まえた上で、ぜひ米山梅吉記念館に足を運び、白瀧が描いた米山梅吉の肖像画をご覧くださいと思います。そして、米山と白瀧の交友関係をさらに紐解くためにも、今後、彼らがやり取りした書簡、どのような交流をしていたのかを示す写真資料、そして何より2点目の肖像画《米山氏ノ像》が発見されることを願っています。

※1 米山梅吉記念館『米山梅吉記念館報』第25号、米山梅吉記念館、2015 p.13

※2 青山学院資料センター編『間島弟彦：小伝』青山学院1977,p.41

※3 白瀧幾之助「肖像畫に就いて」『中央美術』第1巻3号,1915,p.89-90

※4 米山梅吉先生伝記刊行会編『米山梅吉伝』青山学院初等部,1960,p.189

※5 米山梅吉先生伝記刊行会編『米山梅吉伝』青山学院初等部,1960,p.176

※6 米山桂三「父とその子たち」『米山梅吉伝』青山学院初等部,1960,189

※7 服部正平「米山さんの心構えと心遣い」『米山梅吉伝』青山学院初等部,1960,p.359

地域と共に 但陽美術館



当美術館のある兵庫県朝来市生野町は円山川と市川の源を発する山紫水明の町です。また平安時代に開坑して以来1,200年を超える歴史があり、銀山の町として古くから人、物、文化の交流がありました。その中で、日本の近代洋画界を代表する生野出身の三大画伯が明治時代に相前後して生まれ育ちました。三大画伯とは白瀧幾之助、和田三造、青山熊治のことであり、いずれも画家を志して上京。東京美術学校で学び、欧米に留学。帰国後は文展、帝展などの官展を舞台に活躍しました。

当美術館は本館と東館、別館の3つの建物からなっており、当初本館は、昭和50年に但陽信用金庫職員研修所として完成しました。その後昭和59年に博物館登録を行い、名称も但陽美術館に変更しました。1階ホールには青山熊治の代表作「金仏」「投網」をはじめ西洋画やロダン、ブールデルなどのブロンズ彫刻を展示しています。このホールは当金庫の会議や研修に使われるほか、地元の皆様の会合やコンサートにも提供しています。また、2階には兵庫県ゆかりの作家、田村孝之介、鴨居玲、杉全直、児玉幸雄らの絵画を展示しています。

平成7年には生野三大画伯の作品のみを展示した但陽美術館東館を新築し、白瀧の「羽衣」「朝霧」、和田の「湖畔の風景」「昭和職業絵巻し」、青山の「ロシヤの女」「静物(野菜)」など約六十点を展示しており、画風の違いをご覧いただけるようになっています。令和元年には「但陽美術館別館」を開設し、バルビゾン派の作品を中心に19世紀のフランス絵画33点を展示しています。

当金庫の美術品の収集は、前理事長桑田利文が「生野3画伯の作品を地元に残したい」との思いからスタートしたものです。白瀧幾之助については当金庫に親族が勤めていた関係もあり、油彩や水彩だけでなくデッサンも多く所蔵(約120点)しております。

当美術館は常設展ではありませんが、毎年九月に地元生野町で行われる「銀谷祭り」には例年一般公開しており、また地元の小学校や中学校、高校の授業の一環としての美術鑑賞も行っております。

生野出身である「生野三巨匠」を地元の方にも知ってもらい、気軽に美術品に触れ合える機会を提供出来る場所として、今後も一般公開を行っていく予定です。



生野ロータリークラブと但陽美術館



但陽美術館で開催された生野RC主催のIM

生野ロータリークラブの例会場は長年、但陽信用金庫さんの御厚意で研修棟を使用させていただいており、ガバナー公式訪問やIMなどの特別な行事のときには数多くの美術品が展示されている但陽美術館を会場にさせていただいております。

特にガバナー公式訪問の時には但陽美術館内にある貴賓室にて会長幹事会、ガバナーを迎えての例会は絵画や彫刻などの芸術作品に囲まれた1Fフロアにて行っており、とても貴重な体験をさせていただいております。

例会後にはガバナーと随行員の方々を各美術館にご案内し、職員さんに説明を受けながら作品をご堪能していただいております。特に東館には生野出身の明治から大正、昭和にかけて活躍された白滝幾之助、和田三造、青山熊治の生野三巨匠の作品があり、生野ロータリークラブの会員も毎回拝観させていただきます。

今回、米山梅吉記念館さんの過去の館報や阿部さんの論文を拝見して、米山さんと白滝画伯の関係性を知り、少なからず生野とロータリーのつながりを感じています。

これを機に、もっと多くの方々にお二人のことを知ってもらえるような事業を進めていくことが生野やロータリークラブのPRに繋がるのではないかと考えております。



生野RCの例会風景

2022－2023 年度 ご寄付をいただいたクラブ（賛助会を含む）

2500 釧路北、浜中、釧路、北見東、帯広南、旭川空港、弟子屈、名寄 2510 千歳セントラル、当別、札幌北、白老、千歳、七飯、美唄、札幌西 2520 遠野、岩出山、釜石、亘理、栗駒、水沢、名取、岩沼 2530 ガバナー事務所、保原、福島南、郡山東、福島東、郡山、郡山東、原町中央、船引 2540 秋田中央、潟上、秋田東、秋田、秋田南、大館 2550 下野上三川、栃木西、岩舟、今市きぬ、栃木、宇都宮陽北、黒磯 2560 三条東、三条北、三条南、柏崎 2570 川越小江戸、新座、鶴ヶ島、坂戸、新所沢、行田、川越中央、新狹山、新座こぶし、志木川越、岡部 2770 浦和北東、鳩ヶ谷、大宮中央、鴻巣水曜、春日部西、岩槻東、蓮田、川口、大宮北、三郷中央、浦和北、川口シティ鳩ヶ谷、浦和東、大宮シティ、八潮イブニング 2790 大網、千葉若潮、東金、松戸北、船橋南、野田セントラル、君津、野田東、木更津、野田、八千代中央、流山中央、松戸、船橋東、袖ヶ浦、松戸東、松戸西、佐倉、千葉北、成田空港南、八日市場 2800 天童、鶴岡、上山、寒河江、米沢中央、山形北 2820 守谷、水戸東、水戸南、水戸、水戸さくら、水戸西、玉造、鹿島中央、古河東、日立中央、下妻 2830 ガバナー事務所、青森モーニング、おいらせ、津軽、五所川原、八戸東、三戸 2840 桐生西、高崎東、富岡かぶら、太田、渋川みどり、前橋、前橋中央、桐生赤城、渋川、前橋西 2580 東京武蔵野、東京臨海、東京板橋、東京武蔵野中央、東京東村山、東京臨海東、東京リバーサイド、東京福生、東京本郷、東京葛飾東、東京東、東京紀尾井町、東京、東京江北、東京葛飾、東京荒川、那覇西、東京調布むらさき、東京足立、東京臨海西、東京江戸川中央、東京池袋豊島東、東京秋川、東京東江戸川 2590 ガバナー事務所、横浜戸塚西、川崎西、横浜港南台、横浜あざみ、横浜南陵、横浜中、川崎麻生、川崎大師横浜、神奈川東、横浜南、川崎、神奈川、川崎百合丘、横浜戸塚、横浜港南、横浜山手、横浜ベイ 2600 軽井沢、岡谷、あづみ野、長野西、飯田東、東御、佐久 2610 白山石川、新湊中央 2620 都留、沼津西、御殿場、富士吉田、甲府西、掛川、静岡北、富士宮、大月、浜松北、富士吉田西、富士、山中湖、甲府北、富士山吉原、甲府、浜松南、伊東、浜松ハーモニー、浜名湖、静岡東、甲斐、藤枝、静岡西、清水中央、浜松、浜松中、沼津

北、静岡中央、富士宮西、静岡北、焼津南、新富士、藤枝南、清水、焼津、甲斐の郷、浜松西、沼津柿田川、富士宮、三島西、裾野、せせらぎ三島、長泉、静岡、河口湖 2630 岐阜、津北、中津川、多治見リバーサイド、桑名中央、可児、多治見西、四日市西、松阪 2750 東京中央新、東京町田、東京調布、東京西、東京築地、東京目黒、東京銀座新、東京井の頭、東京品川、東京昭島、東京八王子、東京自由が丘、東京赤坂、東京成城新、東京武蔵府中、東京中央、東京多摩、東京飛火野、東京サンライズ汐留、東京八王子南、東京クロスシティ、東京新橋、東京稲城、東京米山ロータリーE、東京小金井さくら、東京武蔵国分寺、東京高輪、東京芝、東京銀座、東京調布むらさき、東京日本橋、東京蒲田、東京三鷹 2760 稲沢、半田南、一宮中央、豊田三好、一宮北、一宮、名古屋名南、岡崎城南、名古屋錦、常滑、名古屋東山、名古屋名駅、愛知ロータリーE、東海、名古屋南、渥美、豊橋北 2780 ガバナー事務所、平塚、かながわDEI、本厚木、相模原橋本、伊勢原中央、厚木県央、葉山、ふじさわ湘南 2640 ガバナー事務所、高石、有田2000、堺、田辺、堺東、関西国際空港、海南東、有田、りんくう泉佐野、河内長野、松原、岸和田南、和歌山城南、田辺東、新宮 2650 大和郡山、大和高田、京都洛南、奈良、京都イブニング、野洲、京都山城、福井南、京都乙訓、京都伏見、若狹、敦賀 2660 大阪心斎橋、茨木、大阪北、高槻、大東中央、茨木東、豊中、香里園、豊中千里 2670 鳴門、高知東、伊予三島、高松、善通寺、八幡浜 2680 加古川平成、尼崎、神戸東灘、神戸西神、尼崎東、荒尾、三木、津名、神戸東、姫路、神戸垂水、加古川、尼崎北、生野、洲本、尼崎西 2690 笠岡東、益田西、岡山旭川、玉野、総社、児島東、玉島、松江南、大社、岡山、岡山城、児島、松江しんじ湖 2700 小倉、福岡西、直方、久留米、行橋、福岡東 2710 萩、広島、竹原、広島中央、広島西、福山、尾道東、三次中央、呉南、岩国西、岩国、美祢、広島東、萩東、尾道、山口、三原、鞆の浦、山口県央、広島西南、広島廿日市、大竹、柳井西、広島城南、福山丸之内、光、東広島、下関中央、尾道東、呉東 2720 別府、荒尾、熊本江南 2730 ガバナー事務所、加世田、伊集院 2740 伊万里西

2022－2023 年度 ご来館されたロータリークラブ

2500 釧路北 2510 恵庭 2520 名取、久慈、岩沼 2530 船引 2550 宇都宮陽北、黒磯 2560 長岡東、柏崎 2570 川越 2770 浦和北、川口シティ鳩ヶ谷、川口東、川口、大宮中央、大宮シティ、大宮中央、八潮イブニング 2790 市川南、千葉若潮、成田空港南、八千代中央、野田、木更津、松戸西、佐倉、千葉北、成田空港南、船橋西、八日市場 2800 山形北 2820 鹿島中央、下妻 2830 青森 2840 桐生赤城、桐生西、渋川 2580 東京臨海、東京田無、東京、東京池袋豊島東、東京足立 2590 横浜戸塚、横浜港南、川崎麻生、横浜ベイ、川崎西、横浜旭、横浜山手、横浜 2600 松本南 2610 新湊中央、富山 2620 浜松ハーモニー、

沼津西、浜松南、沼津北、浜松中、静岡西、富士宮西、清水、焼津、甲府、富士吉田、藤枝、静岡中央、甲斐の郷、沼津、新富士、富士宮 2630 松阪 2750 東京芝、東京銀座、東京西、東京山王、東京蒲田、東京武蔵国分寺、東京三鷹、東京調布むらさき、東京稲城 2760 豊橋ゴールデン、豊橋北、渥美、岡部 2780 茅ヶ崎湘南、海老名櫛、厚木県央、かながわDEI、本厚木、相模原橋本、ふじさわ湘南、伊勢原中央、葉山 2640 堺北、新宮 2650 敦賀、京都伏見、京都洛東 2660 大阪東、吹田、八尾、交野、豊中千里 2670 松山南 2680 尼崎北、生野、洲本、尼崎西 2700 福岡東 2710 福山、下関西、岩国西 2720 熊本江南 2730 奄美

数字は地区・名称はクラブ 敬称は略させていただきます。（順不同）

ご寄付が新体系に・・・

今期から皆さまのご寄付が次の2体系に変わります。

- ① 賛助会員 (1) 米山記念館コーポレーター（クラブ単位） (2) 米山記念館フェロー（個人単位）
会費一口 10000円/年（20口まで） 会費一口 3000円/年（10口まで）

- ② 特別寄附 個人、団体、法人、クラブ、地区等の記念事業や周年事業等のご寄付。金額の区切りはありません。

※記念館へのご寄付は税額控除の対象となります。あなたと共に成長していく記念館を目指します。ご協力のほどよろしくお願いいたします。

資料をご寄贈いただきました



このたび、ロータリー文庫様からロータリークラブ史、地区史、ロータリーの友、貴重書など約1800冊の資料をご寄贈いただきました。貴重書の中には、戦前の全日本ロータリークラブ会員名簿や、ロータリー第70区年次大会の記録書などもあります。また、第70区時代のガバナー月信や星野行則の著書など、ロータリーを取り巻く時代背景にも触れることができます。

今回ご寄贈いただいた全国のクラブ史は、1000冊を超えています。これまで記念館で収蔵していたクラブ史と併せて、今後、閲覧展示など有効活用の方法を考えています。

日本における初期のロータリー活動を学ぶ機会が増えていくことと期待されます。貴重な資料のご提供をありがとうございました。

お知らせ

米山梅吉記念館 秋季例祭

[日時] 2023年9月16日(土) 14時

[場所] 米山梅吉記念館ホール

多くの皆様のご参加をお待ちしております。

米山梅吉記念館のご案内

新幹線三島駅よりタクシー5分
東名沼津ICより15分

[開館時間] 午前10時～午後4時

[休館日] ●月曜日 ●12月28日～1月4日

●整理のための休館日(5月・8月の特定日)

米山梅吉記念館 館報 Vol.42 秋号

■発行日/令和5年8月10日 ■発行者/公益財団法人 米山梅吉記念館 理事長 松村 友吉

〒411-0941 静岡県駿東郡長泉町上土狩346-1

TEL(055)986-2946 FAX(055)989-5101 E-mail yumh@ai.tnc.ne.jp

米山梅吉記念館
公式ホームページ
<https://yoneyama-umekichi.jp>

